

阿蘇

広報あそ

10
2022 No.213

もつと

高く



02 スポーツの日特別企画
INTERVIEW 石田 大河 選手
EXCITING PLAYERS 甲斐 彪悟 選手
EXCITING PLAYERS 中村 つばさ 選手
EXCITING PLAYERS 早瀬 莉久 選手

10 HOT TOPICS

12 暮らしのインフォメーション

17 お慶び ご寄付

18 すぐできる SDGs

19 図書館へ行こう！

20 人権作文

21 阿蘇医療センター通信 Vol.82

22 ASO田園空間博物館通信 No.97

24 まちの話題

27 地産地消クッキング

28 10月カレンダー

スポーツの日
特別企画
INTERVIEW

7人制ラグビー日本代表

石田 大河 選手

阿蘇市出身の石田大河^{たいが}さんが、7人制ラグビー日本代表として国際大会セブンズシリーズに参加しました。この大会は7人制ラグビーの強豪16カ国が世界中を転戦しながら優勝を争うもので、まさに世界最高峰の舞台と言えます。

「石田さんは、15人制ラグビーの強豪チームである浦安D・ROCKSに所属しながら7人制ラグビー日本代表として活躍しています。まずは7人制ラグビーと15人制ラグビーの違いを教えてください。」

私はそんなに体が大きくありません（※175センチメートル・85キログラム）。スピードやステップで相手を抜いてトライを取りに行くプレーが私の持ち味です。

「一番の違いは人数です。一方でグラウンドの大きさはどちらも同じなので、ボールの展開や勝負の速さが全く異なります。」

「7人制ラグビーの国際大会セブンズシリーズでは日本代表として活躍しました。大会での自分のプレーを振り返ってどうでしたか。」

日本代表としてプレーする石田選手。
(石田さん提供)



石田 大河

ISHIDA TAIGA

1997年10月1日生まれ。阿蘇市乙姫出身。乙姫小、阿蘇北中を経て、九州学院高校に進学。1年生の時には3年生の兄・一貴と共に全国高等学校ラグビーフットボール大会、通称「花園」にも出場した。日本体育大学に進学し、主将として活躍。卒業後、JAPAN RUGBY LEAGUE ONEのNTTコミュニケーションズシャイニングアークスに加入した。

外国人選手との体格差に最初は圧倒された部分もありましたが、そんな相手とどうやって戦っていくかを模索しながらプレーを続けました。終盤ではトライなどのいい結果につながれることもでき、大きく成長できたシリーズだったと思います。

「今回の大会が日本代表デビューとなりました。自分が日本代表に選ばれたときの気持ちはどうでしたか。」

代表として活動するときには、ユニフォームやジャージなどいろいろなものが支給されるのですが、やはりそれらをもたらした時は「ああ代表になれたんだな」と、とてもうれしく思いました。試合では少し緊張もしたのですが、代表のためにがんばろうと思っただけでプレイングしていました。

「地域や周囲の人からの応援を感じたことはありましたか。」

海外で試合がある時間は日本だと夜中になっていることが多いのですが、それでも見てくれるファンがいるのは嬉しいです。

「ラグビーの魅力は何ですか。」

ラグビーは繋がりが最も大事とされる競技です。15人制と比べると7人制は少ない人数で試合をしますが、それでも一人一人ではなく、周りの選手と繋がりがなければなりません。その繋がりの強さが魅力です。

「阿蘇市の子供たちにメッセージをお願いします。」

先ほども言いましたが、人との繋がりはスポーツの魅力のひとつです。スポーツを通じていろいろな人と繋がることができ、言葉が通じない海外の人と

も繋がることができます。スポーツは人生を豊かにしてくれると思うので、ぜひいろいろなスポーツを体験してやってみてほしいです。

私も小学生まではサッカーをしていました。中学ではラグビーの他に野球や陸上などもやりました。小学生のときに休みの時間以外で鬼ごっこをしていたのも、もしかしたら現在のプレーに役立っているかもしれませんね。

「最後に選手としての今後の目標を聞かせてください。」

2年後のバリオリンピックに出場することが今の一番の目標です。生まれ育った阿蘇のためにもがんばりたいと思いますので、応援よろしく願います。

Cover Story

表紙のはなし

内牧にあるボルダリング施設「CLAMP」で練習をする甲斐^{ひょうご}彪悟さん。10月に栃木県で行われる国民体育大会に県代表として出場します。滑り止めで白く染まった手と次に掴むホールド(壁に設置された突起)をまっすぐ見つめる目が印象的でした。詳しくは3~4ページに掲載しています。

10月10日はスポーツの日。みなさんも体を動かして汗を流してみませんか。

スポーツの日
特別企画
EXCITING
PLAYERS

スポーツクライミング

甲斐彪悟 選手

10月1日から栃木県で開催されるいちご一会栃木国体（第77回国民体育大会）。都道府県対抗で行われる日本最大のスポーツの祭典です。今年阿蘇市から3人の選手が県の代表として国体に出場します。

一の宮中出身で阿蘇中央高校3年の甲斐彪悟さん（塩塚）はスポーツクライミング少年男子に出場します。スポーツクライミングは、自分の手足とホールドと呼ばれる突起物だけを頼りに、反り立つ壁を登っていく競技です。東京オリンピックでも正式競技として採用され注目が高まっています。

甲斐さんが競技を始めたのは小学4年生のとき。父親に内牧にあるクライミング施設「CLAMP」に連れていかれたのがきっかけでした。

「小学校のときまではいっしょに切磋琢磨してがんばってきたのですが、中学生になって

からは全く敵いませんね」。CLAMPの常連客も甲斐さんの技術が高く評価しています。めきめきと力をつけた甲斐さんは今年ついに九州大会を突破し、国体への出場を決めました。「スポーツクライミングは頭も使わなければならない競技です。難しいコースをしっかり考えて一回で登りきれたときの達成感が好きです」と話す甲斐さん。「大学生になっても競技は続けます。将来はトップレベルの選手のみが出場できる国内最高の大会、ジャパンカップに出場したいです」。甲斐さんの目はさらなる高みを見据えています。

右から甲斐彪悟さんの父・広太さん、彪悟さん、CLAMPのスタッフ・当麻さん、常連客の大津さん。



競泳 中村 つばさ 選手



中村さん姉妹。左がひかりさん、右がつばささん。

競泳少年女子B（※中3・高1）50メートル自由形に出場する中村つばささん（下役犬原）は阿蘇中の3年生です。つばささんには双子の妹・ひかりさんがいます。2人が水泳を始めたのは小学1年生のとき。一番上の姉が習っていたのがきっかけでした。それからの8年間、2人は一緒に練習を続けてきました。つばささんが「2人ときのほうが練習もがんばれます。1人だけだったらここまで来るのも難しかったかもしれません」と話すと、ひかりさんも「けんかもたまにするけれど2人ときのほうが楽しいです」と続けます。

国体について「国体に出場することが決まって不安もあるけれど、県の代表としてがんばらないといけないと思っています。自己ベストの更新と決勝進出が目標です」と話すつばささん。さらに先の将来について聞くと「高校でもひかりといっしょに水泳を続けられたらと思います。インターハイに出場したいです」。2人の挑戦はまだ続きます。

9月10日、阿蘇市農村運動公園あびかで開催された阿蘇郡市中体連陸上競技大会。各市町村から集まった多くの選手が汗を流す中、走幅跳の会場でひととき大きな注目を浴びる選手がいました。

走幅跳（男子少年B）で国体に出場することが決まっている早瀬莉久さん（一の宮中3年・古神3区）でした。競技開始の合図がかかると、早瀬さんは得意とする助走で加速。勢いに乗ったまま左足で踏み切りました。空中で左足と右足を入れ替え、そのまま両足で着地。6メートル近いジャンプでこの大会での優勝を決めました。

早瀬さんが陸上競技を始めたのは小学校2年生のとき。陸上競技が好きだった父と一緒に時々練習をしていました。4年生のときの大会で初めて走幅跳到挑戦。3位になったことがきっかけで本格的に走幅跳を始めました。

競技を始めて以来、練習を休みたいと思っただけではないと言います。早瀬さん。「遊びたいと思うことはあるけれど、いい記録を残したいという気持ちのほうが強い」と話します。

競技への情熱に加えて、心の支えとなっているのがチームメイトの存在です。「練習のときはまじめにしていますがそれ以外の時間はふざけたりして楽しませてくれます」。早瀬さんはこう続けました。「チームメイトに褒められるとうれしく思いますし、モチベーションにもなっています」

国体では自己記録の6メートル69、そして県記録の6メートル91をも上回る7メートルが目標。大切な仲間への感謝を胸に、全国の舞台での飛躍を誓います。



早瀬さんと一の宮中陸上部3年生の仲間たち。
後列中央が早瀬さん。

スポーツの日
特別企画 **EXCITING PLAYERS**

陸上競技 早瀬 莉久 選手